220　^{99m}Tc-ECD SPECT を用いた初期アルツハイマー型痴呆患者のPatlak Plot法による脳血流量測定

中野正剛、松田博史(国立精神神経センター武蔵病院放)

初期アルツハイマー型痴呆に^{99m}Tc-ECDを用いて、PatlakPlot法により脳血流量を定量した。　対象は、正常コントロール11例と、NINCDS-ADRDAによりアルツハイマー型痴呆と診断された24例で、possible10例、probable14例、の2群に分けられた。mCBFは正常群に比べてpossible群は有意差がなかったが、probable群は有意に低下していた。rCBFは両側の海馬、縁上回及び角回で正常群に比べ、possible群、probable群で有意に低下していた。下及び中側頭回では正常群に比べてpossible群は有意差をみなかったが、probable群は有意差を認めた。　以上の結果より、^{99m}Tc-ECD　SPECTによる脳血流測定は初期のアルツハイマー型痴呆の診断に極めて有用であると考えられた。

221　West症候群におけるTc-99m HMPAO SPECTの検討

渡邉嘉之,藤田昌弘,西村恒彦(阪大ﾄﾚｰｻ)　森脇博,奥直彦,石田麻理子,植原敏勇(同放射線部)　橋川一雄,清家裕次郎(同１内)　小高隆平,永井利三郎(同小児科)

乳児期てんかんの１つであるWest症候群13例(平均年齢8.5ヶ月)の発作間歇期脳血流SPECTを検討した。13例のうち潜因性が５例、症候性が８例で、すべてにSPECT,MRI,およびEEGを施行し、２例では治療前後にSPECTを撮像した。SPECTにて局所的な異常を認めたのは12例(血流低下11例、増加４例)、MRIでは６例であった。局所的な血流異常は主に前頭葉（８例；６例で左側優位）、小脳（６例；３例で左側優位）に認められた。SPECTではMRIでは認められなかった左右での血流差を認めた。治療前後に検討できた２例では、両者とも血流の改善を認めた。SPECTはMRIと比べ、局所的な異常の描出能に優れ、また治療効果の判定に使用可能であることが示唆された。

222　99mTc-HMPAO SPECTによる脊髄小脳変性症の検討

寺川晴彦，阿部和夫，柳原武彦(大阪大学神経内科)，西村恒彦(大阪大学トレーサー情報解析学)

脊髄小脳変性症(SCD)における脳灌流と臨床症候との関係について検討した．対象は臨床症候および頭部MRIによりSCDと診断した13名(男性8名，女性5名，年齢36才～67才)．小脳症候のみを発現しているⅠ群(n=3)と小脳症候に錐体路症候，錐体外路症候なども発現しているⅡ群(n=10)とに分類した．HMPAO- SPECTでの関心領域は，各部位で設定し，後頭葉との比を求め，患者群およびコントロール群間での比較，重症度との相関を検討した．患者群ではコントロール群と比較して，小脳半球および小脳虫部での取込みが低下していた．患者群間の比較では有意差はなかったが，Ⅱ群では，2例で前頭葉での取込み低下を認めた．重症度と橋，小脳半球および小脳虫部での取込みに有意な相関が認められた．

Presented by Medical*Online